

肌が触れて感じる温かさ

山下紗織

四年前、初めていずみナーサリー^{注1}を訪れた時のことです。午睡明けの0歳の女の子がハイハイをしてやってきて、正座をしていた私のひざの上に、ひとつずつ手を置きました。その小さな手のあまりのやわらかさに、硬くなっていた私の身体はふっと緩み、ただただ静かな感動が込み上げてきました。忘れることのできない、子どもの肌のやわらかさとの出会いです。

倉橋惣三は、手や頬^{ほお}と同じようにやわらかい子どももの「心のはだ」に、がさがさに荒れた大人の心のはだ

はだで触れることを恐れると言います。私は月に数回、ボランティアや保育お姉さん^{注2}を通して子どもたちの生活の中に身を置いていますが、子どもにじっと見つめられる時、その奥にある子どものはだのやわらかさと、同時に、子どもを見つめる自分の粗い心のはだを、ひしと感じることがあります。涙をいっばい溜^ためた目、驚きに見開かれた目、真剣に見据える目。保育を終えると、そんな子どもの表情を思い出せば、ああ申し訳なかつたと思ったり、あれでよかったのかと思いい巡らしたりすることがあ

ります。それは、子どものやわらかい心のはだに触れる自分の粗い心を、省みているといえるかもしれません。

昨年の秋、一歳半のYの母親に、保育お姉さんを頼まりました。ナーサリー閉所後の数十分間、Yを連れて学内で遊んで待っていてくれないか、ということでした。学内でYと二人で過ごすのは久しぶりでした。ナーサリーの閉所時間が近づくと、Yはお迎えを気にし、そわそわし始めました。その日、Yの母親もナーサリーの保育士さんも、事前に「今日は、さおちゃん（Yが私を呼ぶ呼び方）の日だよ」と話してくれていましたが、やはりYは母親のお迎えを待っているようでした。

閉所時間になり、私は「じゃあYちゃん、さおちゃんと一緒にお散歩に行こっか。今日はお魚いるかな」と言いました。Yはお気に入りのカエルのバッグをしつかりと握り、口元にわずかな笑みを浮かべ

てうなずくと、私の手を握りました。主任保育士のK先生に見送られ、私とYはナーサリーを後にしました。辺りはもうすっかり暗くなっていました。風はひんやりと冷たく、空もどんより曇っていました。

Yは、いつもは「自分で」と一人で歩くのですが、この日はすぐに両手を差し出し、抱っこポーズ。「Yちゃん、びよーん」と言ってYを抱き上げ、Yとよく一緒に歩いたルートを通って学内のベビールームに向かいました。いつもと同じように、エレベーターに乗ったり、猫を探したり、池の鯉を見たりしながら歩いていると、私の腕の中にあるYの表情と身体が、次第にこわばっていくのがわかりました。そういえば、こんな暗い中を二人で歩くのは今日が初めてだ、見慣れない風景に、ひんやりした空気に、Yは不安を感じているかもしれない、ただでさえ今日はママのお迎えを待っているようだったのに……と、配慮が足りなかったことを申し訳なく思いながら、Yに「大丈夫よ」などと声をかけ、少しは明る

く暖かいベビールームへと足を速めました。

ベビールームに着くと、いつもはすぐに遊び始めるYが、こわばった表情のまま、私の顔をじーっと見つめて立ちすくんでいました。閉所間際に何度もドアを見つめ、バッグの持ち手をぎゅつと握り、両手で抱っこを求めたYの姿が頭をよぎり、暗く少し冷たい空気をまだ肌を感じながら、「ママがよかったよね、ごめんね」という言葉が私の口からこぼれました。途端に、Yは堰を切ったようにわーんと泣き始めました。ああ申し訳なかったと思いながら、大丈夫、大丈夫、と抱きしめると、Yは泣きながらも身体を私に預け、その冷たく滑らかな頬が私の頬にくっつきました。

そこに「Y!」と母親が迎えに来ました。するとYは「ママ!」と言って母親のもとへ行った後、すぐにそこから離れて満面の笑みでベビールームに置いてあった絵本を手に取りました。その様子に、母親も私も、思わず顔を見合わせ笑ってしまいました。

いま、この時のことを思い出すと、ただ大人の粗い心を省みていた時とは少し異なる思いが浮かんできます。母親が迎えに来るまでのYの心のはだは、その頬と同じように冷たくなっていたかもしれない。私のせいで……と、いっそうがさがさした私の心のはだで、Yの心のはだは心地悪かったかもしれない。しかし、少し経つたいま思うのは、少し心のはだが荒れたり冷たくなったりしてしまっても、それでも「大丈夫」と思える、肌の触れ合いがあるのではないか、ということ。泣きながらも、あらがうのではなく身体を寄せてきたYの冷たい頬と、けろりとしたようなYの表情を思い出す時、そこに、少しだけでも温かい私の頬があつてよかった、と思うのです。何だか心がざわざわするけれど、でもきっと大丈夫、と思えるような存在に、私はなれていただろうか、と思うのです。

子どもたちは、育ちの中で、きつとさまざまにそのやわらかな心のはだに刺激を受けて生きていくと

思います。そんな時、その肌の荒れや冷えが少し癒えたり温かくなったりするまで、大丈夫、大丈夫、と願いながらいてくれる存在が、子どもたちのそばにあつてくれればいいと思います。

「子どもの心のはだ」を著した当時の倉橋に思いを馳せると、「自省」「道徳」「作法」に彩られた大人と子どもの関係に危惧を感じ、大人の心を「がさがさ」「粗い」と表現しながら、一人の保育者として、どう子どもと共に行うことができるか、思い巡らしていたのかもしれないと思えてきます。しかし、目の前の子どもへの傍には、ただ一人の保育者だけでなく、多くの人やものがあります。そして、時にそんな大人の心が「自省」や「作法」などで、がさがさになってしまったとしても、子どもの幸せを願うその心はきっと温かいに違はなく、その温かさが子ども心にとつては、ありがたいものとなつてくれるのではないでしょう、うか……。

このことは、子どもだけでなく、私(大人)にとつ

ても同じことかもしれません。普段の生活の中でも、保育をしている時でも、自らの心のはだが、がさがさしていることに気づき、反省したり落ち込んだりする場合があります。でも、きつとそれでも大丈夫、と思えるのは、そんなありがたい人やいろいろなものが、自分を受け止めてくれていると感じられるからではないかと思えます。

たくさんの温かい人たちに囲まれた後の帰り道、そんなことを考えました。

(お茶の水女子大学大学院生)

注

1 大学附属の保育所。生後六か月〜三歳未満の子どもが入所している。学生ボランティアの受け入れをしており、筆者は二〇〇六年の十月からボランティアとして、週に一度、保育に入らせていただいている。

2 いずみナーサリーに通所する子どもを、主に開室時間前後に保育する学生のベビーシッター(「保育お姉さん」)。筆者は二〇〇七年四月から今日までの間、十名ほどの子どもの保育お姉さんとなっている。